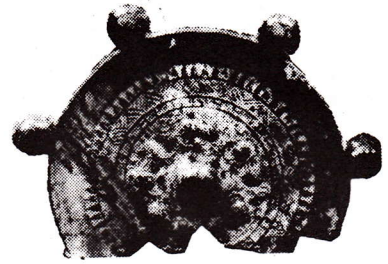


文化財やまと

大和町文化財保護協会発行



七鈴五獸鏡

「大和町の文化財」改訂版 発刊に思う

会長 土松 新 逸

文化財は、その地方の歴史や文化を正しく理解するために最も大切なものでありますことは、今更に申し上げるまでもないことであります。

大和町の歴史は古く、大和町史通史編上巻に見るように、原始・古代の遺跡・遺物が相当に多く、先人の残した貴重な文化財が数多く伝えられていますこともご承知の通りであります。

殊に、中世において東氏が残した文化遺産は莫大なものでありまして、大和町の誇りとするものであることも周知の事実であります。しかし、これらの文化財について、昭和八年、小間見川がオオサシショウウオの生息地として国の指定があったほかは、ほとんどかえりみられませんでした。

大和町の文化財保護活動が実質

まして、貴重な数々の出土遺物及び庭園遺構の検出によって、文化の高い東氏の生活様相の一端をうかがい知ることが出来たこと、は、全く思いがけない収穫でありました。

また、平成五・六年には白雲山遺跡の発掘調査が実施されました。貴重な遺物や仏像が出土しました。こうしたことによって、大和町の文化財はますます数多くなりまして、「大和町の文化財」の改訂版を刊行してはという議が起り、平成五年二月町教育委員会にて立案され、町史編集委員に編集の要請がありました。当時、町史史料編続編の編集作業に全力をあげてとりかかっておりましたので大変ではありましたが、「大和町の文化財」刊行後十数年になつており、文化財の数も当時の倍以上になつております現在、一時町史編集作業をストップしてでも「大和町の文化財」に専念しようということになり、大和町の文化財に深いかわりのある佐藤とき子先生も編集委員にお願いして編集

を刊行するのだから未指定の文化財も入れてはということになり、その作業がまた大変でありました。殊にかねてから指定予定の天然記念物や古文書・絵画・書跡・彫刻・建造物・新出土品などが多く、これらの指定作業に意外に手間どりました。

こうして、畑中委員長ほか一〇名の委員の献身的な努力によって指定文化財は一三〇件ほどになり、立派な「大和町の文化財」が出来上がりましたことは、まことに感激のきわみであります。

なお、先般東風駿氏より大和町へご寄贈されました「東家資料」の一部を収録して巻頭を飾ることができましたことはまことにありがたいことでありました。

この「大和町の文化財」の一冊によって、大和町の古い歴史をたどり、遠い祖先の生活の跡を知り、その高い文化に出会うことができると思います。

しかも、写真によって幼い子たちにも、大和町の歴史と文化を知っていただけたと思います。

町内の各ご家庭にこの一冊を是非お備え下さることを希望いたします。

その後、昭和五五・五八年にわたり東氏館跡の発掘調査が行われ

中国旅行

北京・西安を訪ねて

畑 中 浄 園

岐阜県歴史資料保存協会（会長 太田三郎氏）創立二〇周年の記念事業の一つとして、中国の檔案館（歴史資料の収集・整理・保管・利用などを行う機関）との親善交流を目的とし、その他の史跡文化にふれる旅が実施された。

平成六年九月一九日、一行三十六人（内、郡上郡から土松・高橋氏と私の三人）を乗せた日航機は、午前一〇時、名古屋国際空港を飛び立った。好天に恵まれ機はほとんど動揺せず、白雲の切れ目から瀬戸内海が見えかくれる。午後一二時四〇分、北京空港に到着した。日本と北京の時差はおよそ一時間、時計を一時間おくらせる。待機していた観光バスに乗る。はじめてみる北京市街は予想通り、自転車の流れがづく。街路樹は

プラタナスの類でその緑はきわめて濃く、日本では見られない青緑で、街の中の樹木というより、樹木の中の街といった風景である。三時、最初の見学地故宮につく。故宮博物院 太和門を入ると、眼前に壮大な木造の太和殿が展開する。二重の入母屋造りで、その威容に驚歎する。石の階段とその両側に並ぶ石柱の彫刻、どこかで見た覚えがある。それは、昭和六三年上映された「ラストエンペラー」（イタリア人ベナルド・ベルトルッチ監督・脚本）の最初の舞台がここであった。清朝八代の光緒帝に子がなく、帝の甥にあたる溥儀が三歳で即位し宣統帝と称した。まもなく孫文による辛亥革命によって退位させられた。時に帝は六歳で、以後彼はこの紫禁城（

故宮の名前）で成長したが、一八歳のとき軍閥によって追放された。日本の政策によって満州国が建国されると、迎えられて皇帝となった。時に帝は一八歳であった。もともと清朝は満州族の建てた王朝であるから、溥儀が満州国の皇帝となったことは、たとえ日本の傀儡国家であったにせよ、溥儀にとっては感慨深いものがあつたにちがいない。日本の敗戦によって満州国はわずか一四か年で瓦解し戦犯としてシベリアに送られ、東京裁判に証人として立ったり、中国政府に引き渡され労働を強いられしたが、昭和三四年、特赦によって北京に戻った。八年後の昭和四二年、ガンのため北京で死去した。数奇な運命をたどった一生であった。

太和殿・中和殿・保和殿と巨大な建造物を囲むように六〇余棟があると案内嬢の説明を聞く。こうした建物の中に約百万点の所蔵品があり、そのうち二千点余が陳列されているという。なお、この収蔵品の過半数は、国民党の台湾移住によって、もち去られ、台北市の故宮博物館に蔵せられている。殿内に陳列されたものは、石器

時代から清朝に至るまでの数千年にわたる遺品遺物で、石器・青銅器・陶磁器・玉器・漆器・金銀器・書・絵画・織物・刺繍など、何日かかっても見尽くせない。案内嬢にうながされてバスに乗る。過去にくりかえされた歴史の舞台をあとにする。民族の愛と憎みあつて壮大な文化を形成した歴史を肌で感じながら、バスは天安门広場についた。午後五時五〇分である。

天安門広場 故宮の正門である天安门前にひろがる四〇ヘクターといわれる広場、門に向かって左（西）に人民大会堂がある。中国の政治の中枢で一二億といわれる中国統治はここで行われている。一九八九年（平成元年）民主政治を要求して北京の大学生が行ったデモに対し、戦車が出動してこれを鎮圧したテレビの放映を思い出す。毛沢東主席の遺体もこの一角にあるという。夕やみせまるころ、高く湖畔のしだれ柳に光をそいでいる。

万里の長城 九月二一日、早朝六時起床、七時朝食、八時一〇分ホテル発。北京の街は濃緑の並木の道に通勤の自転車の列がづく。



档案馆訪問

れる灰黒色の幅は五〜六mで塼と呼ば

る。北京最後の晩、自宅に国際電話して相互の安否を確認した。二二日、早朝四時三〇分起床、五時朝食、五時四五分ホテルを発

大明宮の含元殿跡 西安市から

成六年度中に着工されるという。

の幅は七〜八m、高さも七

造技術のすばらしさに感動する。帝が全財産を投じて造営したと通訳案内嬢の説明を聞く。

一行を乗せたバスが平原を通りぬけて西安の市街地に入る。紀元前一〇二七年周王朝がこの地に都

胸に浮かぶ。日本の新聞によると、掘調査が行われることとなり、平

争の歴史であ

も用いず、ドーム形の天井で、石

が見えてくる。北京からおよそ一時間半、九時一〇分西安空港に安

外国の使節が天子に拜謁した所である。日本の遣唐使が命がけて海

の歴史は、この

は地上の宮殿の配置そのままに、前殿・中殿・後殿・左配殿・右配殿の五室がある。そこには柱も梁

流して、急角度で東流するあたり

落ちてい。大明宮は唐の第二代太宗李世民（在位六二六〜六四九年）が造営し、その中の含元殿は

の長城は北方

の皇帝十三人の陵のことで、北京

教の高僧で日本の浄土教に深いかわりのある曇鸞大師・道綽禪師の遺跡玄中寺がこの山脈中にある。

北の郊外に出ると田園がひらけ、農民の姿があちこちに見られる。バスから降りて小道を歩く。足もとを注意してみると青磁の小片が

遊牧民族が、

市街からおよそ八〇km北で、北京

斜めに横切っ

万里の長城

活気に満ちた姿は、共産国でありながら、一部資本主義の自由を取り入れた新しい国造りの路線を歩む中国の旺盛なエネルギーを感じる。市街地を離れると、農家が点々と見えてくる。古レンガを積み重ねた低い壁にかこまれた農民達の生活の場が垣間みえる。屋根にはトウモロコシが無雑作に乾してある。路は一直線に北に向かって続く。両側には背の高いプラタナス

の並木がつづいて、凡そ二時間二〇分かって長城の麓につく。そこから頂上までケーブルに乗る。数分にして長城に着く。山脈の尾根を延々と続く長城は、戦国時代（前四〇三〜二二一）に北方の諸侯が自国を守るために築いた長城を、秦の始皇帝（在位前二二一〜二一〇）がこれをつなぎ、さらに延長したといわれる。見渡すかぎり延々と長蛇の如く起伏する景観はただ驚嘆するばかりである。この

練瓦を積み重ね、全長六〇〇〇kmといわれる。明の十三陵 バスは再び並木路を南下して、明の十三陵についてのが午後二時。およそ百余年続いたモンゴル（蒙古）族の元朝を倒して、再び漢民族国家を建てたのが明王朝（一三六八〜一六二〇）である。初め金陵（南京）に都していたが、北方のモンゴルの勢力に對抗して明朝第三代の永樂帝が北京に都した。十三陵というのは明

機は八時三〇分ごろ太行山脈を斜めに横切っ

中国国際航空



万里の長城

陝西歴史博物館 午後訪れたこの博物館は、かつて周恩来首相（一八九六〜一九七六）の生前の指示によって一九八五年着工し、一九九一年完成開館したという。

この博物館は奈良の唐招提寺の建築様式がとり入れられ、吹き抜けの廊下があり、屋根の両端には鴟尾がとりつけられている。

中国の旧石器・新石器時代の出土器から、周代の鼎・銅鐸、唐の三彩など展示器は三〇〇〇点に及ぶという。

館長の王世平先生の歓迎の挨拶につき、馬信志先生の講話を聞いた。その中で、この陝西省は考古学的に最も重要な所であり、青

磁はすでに北周（五五八〜五八二）のころにつくられていたと話された。一時間余の講話であった。西安の第一夜をホテル「ロイヤル西安」で泊まる。

茂陵 二三日、西安市の西門を出ておよそ一時間、茂陵の見学。茂陵は前漢の第七代武帝（在位前一四一〜八七年）の墓である。

漢の皇帝は即位すると二年目から没年に至るまで自分の陵を造営することになっていったという。即ちこの陵は五三年間という長い年月をかけて造営され、国民の総生産の三分の一がその工事や副葬品の購入に充てられた。武帝は即位の翌年に元号を建元と名付けた（前

一四〇年）これが中国の年号の始めで、清朝の滅亡（一九一一）まで続いた。

武帝は北方の匈奴を挟み打ちにしようとして、張騫を西方の大月氏国に遣した。この計画は失敗したがそれによって西方交通の事情が明らかとなり、いわゆるシルクロードが開発されたことは有名である。

霍去病の墓 茂陵から東北一kmの所に霍去病の墓がある。彼は武帝に仕えた将軍で、匈奴遠征の勇者として高校の教科書にも登場する人物である。墓の中段に馬の石像が並ぶ。中でも、「匈奴を踏みつける馬」の彫像は有名である。

数十段の石段を上ると、極彩色に色どられた堂祠がある。ここから西方を眺めると一面の草原が地平線のかなたに消えてゆく。午前中はあつという間に過ぎて例のおりの中国料理で昼食をとり、午後

を建て、将来してきた経典や仏像を収めた。

玄奘のインド旅行記『大唐西域記』の中に、インドのマガダ国に一人の比丘が三淨肉（我がために殺すのを見た肉・そのことを聞いた肉・そうではないかと疑わしい肉でない肉のこと）が得られず、空飛ぶ雁の群れにむかって、自分の飢えをうったえた。するとその中の一羽が比丘に淨肉をささげようと自ら地上に落ちて死んだ。比丘は驚いてこれ菩薩ならんと、塔を建ててその雁を厚く葬ったという。インドでこの話を聞いた玄奘はそれを旅行記に記し、かつ高宗に願って建てた。（六五二）

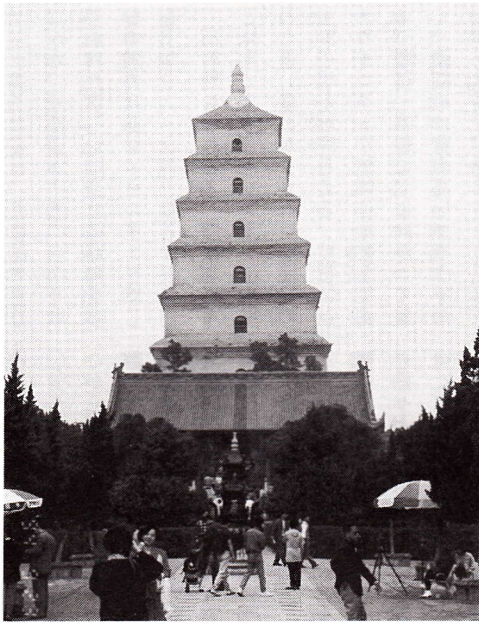
塔は初めは五層であったが、その後崩壊し、たびたび重修されたが、清の康熙年間（一六六三〜一七二二）に重修されたのが現在の高さ六四m、七重の塔である。三蔵法師の業績を偲びながら五層まで登ったが、老体の足が力を出しきってついに七層まで登り得ず降りたことにした。

碑林 大雁塔の感銘がさめやらぬ中に、一行は碑林博物館についた。館の中には各種の石碑が林の如く立ち並んでいる。第二室に

入ると、すぐ目について驚いたのは「大秦景教中国流行碑」である。かつて京都大学の研究室の玄関でしばしばこの碑の模造碑を見上げて碑文を読んだ記憶がよみがえった。今その本物に直面したのである。色合い形態はそっくりである。大秦とはローマのことで、景教とはネストリウス（？〜四五二ごろ）のとなえたキリスト教の一派である。三位一体説（キリスト・神・聖霊は一体である）に反対して三位は別々で一体ではないといつて正統キリスト教から異端者として追放された。しかし彼の教えは東方のシリア・ペルシアを経て中国に伝えられ、その教会は大秦寺と称せられた。この碑の建立は七八一年である。当時唐の都長安には外来宗教が多く伝来し、回教（イスラム教）・祇教（ゾロアスター教、拜火教ともいう）麻尼教などが布教され、長安は国際都市の様相を呈していたという。

この碑林博物館には、各時代の有名な書家の筆跡がのこり、短時間ではとうてい見尽くすことができない。

秦の兵馬俑 二四日、かねて聞いていた秦の兵馬俑見学のため、



大雁塔

慈恩寺・大雁塔 日本にもその名の聞こえた慈恩寺は、唐の三代高宗（在位六四九〜六八三）が亡母の慈恩を追慕して建立した寺である。玄奘三蔵がインドからもたらした経典をこの寺で漢訳した。玄奘はまたこの寺の境内に大雁塔

を建て、将来してきた経典や仏像を収めた。

入ると、すぐ目について驚いたのは「大秦景教中国流行碑」である。かつて京都大学の研究室の玄関でしばしばこの碑の模造碑を見上げて碑文を読んだ記憶がよみがえった。今その本物に直面したのである。色合い形態はそっくりである。大秦とはローマのことで、景教とはネストリウス（？〜四五二ごろ）のとなえたキリスト教の一派である。三位一体説（キリスト・神・聖霊は一体である）に反対して三位は別々で一体ではないといつて正統キリスト教から異端者として追放された。しかし彼の教えは東方のシリア・ペルシアを経て中国に伝えられ、その教会は大秦寺と称せられた。この碑の建立は七八一年である。当時唐の都長安には外来宗教が多く伝来し、回教（イスラム教）・祇教（ゾロアスター教、拜火教ともいう）麻尼教などが布教され、長安は国際都市の様相を呈していたという。

一行を乗せたバスは西安市のビル街を通りぬけ田園地帯を東北に進む。午前九時備坑につく。ここは一号坑で、昭和四九年、農民が井戸を掘った時発見されたという。四列縦体に並ぶ武装した兵俑は等身大で屈強な体軀、各々の顔はそれぞれの特徴を現し、同じ顔は一体もない。馬俑はその後方に並んでいる。総計は七〇〇〇体、八〇〇〇体ともいわれている。このような軍団が始皇帝の陵の地下宮殿を守護するように二号坑、三号坑とつづいているという。

華清宮と楊貴妃 兵馬備坑を後にしてバスは約三〇分、午前一時三〇分、驪山の麓の華清宮につく。華清池をはさんで幾多の華麗に彩色された楼閣がたち並び、回廊がそれらを結んでいる。樹齢千年というザクロの木が何本も池の岸に繁り、ここに展開された栄枯盛衰の歴史のあとが偲ばれる。唐の六代玄宗皇帝が七四七年（天宝六年、日本聖武天皇天平一九年）ここに宮殿式建物を造営し華清宮と名づけた。

これよりさき玄宗は聡明で美麗な武恵妃の死にあった。落たんした帝はこれにかわる妃を求めて、花鳥の使を全国に派遣したが、武恵妃に匹敵するような女性を捜すことができなかった。ところが帝の子息寿王の妃に心ひかれ、この妃を出家させて道教の道士とし、寿王と離婚させ、つづいて還俗させて自分の妃とした。時に玄宗六一歳、妃は二六歳であった。それより楊氏一族は高位高官を占め、特に楊国忠は宰相となって勢力を振った。

玄宗は楊貴妃を迎えて華清宮に妃専用の蓮花湯と海棠湯という浴場を造った。復元されたこの浴場を眺めつつ、「春寒うして浴を賜う華清の池。温泉の水滑らかにし凝脂を洗う」白居易（白楽天）の詩「長恨歌」の一節を思い出す。名君玄宗皇帝も楊貴妃に心奪われ、ついに国を傾けることになる。安祿山の反乱軍が長安に迫った。帝はついに都を捨てて成都（四川省）に逃避することとなった。都城をはなれて一日目、馬嵬に着くと、宰相楊国忠と楊貴妃を処刑しなければ一歩も進まないという部下のクーデターがおこった。楊貴妃と楊氏一族は帝の眼前で首をくられた。時に妃は三八歳であった。後世、世界の三大美人と称せられた一人、楊貴妃の最後はこのような悲劇で終わった。

もう一つ思いおこすのは、一九三六年（昭和十一年）の西安事件である。蒋介石と毛沢東が抗日統一人民戦線をつくり上げた。このときの弾痕がそのまま残っている。多くの悲劇によって歴史は流れてきた。時計を見ると集合時間を過ぎていた。急ぎバスに駆けつけ平身低頭する。

青竜寺 屋敷は依然として中華料理、なるべく刺激性の弱いものを食をすまず。青竜寺に着いたのは午後二時。弘法大師空海が第一八回の遣唐使の船で入唐して、恵果阿闍梨から密教を学んだ寺である。恵果・空海記念堂が建てられ、堂内には両師の座像が並んでいる。日本流の庭園の石と周囲の桜は日本から運ばれたという。前庭には空海記念碑が立てられ、日中友好のシンボルとなっている。詳しいことは高橋義一氏の「弘法さまと青竜寺」（史苑やまと）創刊号）を見ていただきたい。

西安の西門 青竜寺参拝を約一時間ですまし午後三時、西安城壁の西の門に登る。城壁は周囲一・九km、高さ二二m、厚さは下部一五m、上部一二m、一四m。明朝



青竜寺 空海記念碑

った。さらにここへもたらされた
 文物が、やがて日本へも渡来して、
 これを奈良の正倉院に見ることが
 できる。このように考えればこの
 門は、日本と西方を結ぶ中間点の
 役割を果たしたともいえる。恐ら
 く再び訪れることのない城壁を後
 にして一行は西安ロイヤルホテル
 に戻る。ホテルから自宅に電話を
 する。所定のダイヤルを回すとす
 ぐにつながって、安否を確認する。
 科学文明の有難さを感じる。

これは安祿山の乱で国土の荒廃を
 うたったもので、日本の敗戦当時
 よくこの詩がうたわれた。
 李白や杜甫と親交が厚く、詩文
 をよくし、ついに不帰の客となっ
 た阿部仲麻呂(七〇一〜七七〇)
 が「三笠の山に出でし月かも」と
 詠じ、この月を眺めて古郷を偲ん
 だことであろう。
 西安最後の晩はさすがに寝つか
 れず、我が

身が今、古
 都西安にい
 ることの実
 感をかみし
 めた。
 (七〇一〜七六二)の詩が思い出
 される。

長安 一片の月
 万戸 衣をうつつの声
 秋風 吹きて尽きず
 総べてこれ 玉関の情
 何れの日にか 胡虜を平げ
 良人 遠征を罷めん
 千二百余年も前の長安の夜の情景
 を思いえがく。
 また杜甫(七一二〜七七〇)の
 国破れて 山河あり
 城春にして 草木深し
 時に感じて 花に涙をそそぎ
 別れを恨んで 鳥にも心驚かす

て二五日、
 早朝五時に
 起床、六時
 ホテル発、
 一夜明け
 着。八時一
 六時四〇分
 〇分、中国
 東方航空会
 社の飛行機
 は離陸した。
 途中一〇時
 上海着、機

上のまま出発を待つ。一時三五
 分機はとびたち、午後二時三〇分
 名古屋空港に到着。ここに前後一
 週間の旅を一同何の事故もなく終
 わることができた。
 団長の太田三郎先生、副団長の
 丸山幸太郎先生、幹事の臼井・木
 下両先生をはじめ団員の方々に厚
 く謝意を表してこの記を終わることとする。



西安市の西門

平成六年度 事業報告

- 4月8日 役員会、平成5年度事業報告、平成5年度会計決算報告、平成6年度事業計画、平成6年度予算、平成6年度総会の期日、日帰り研修旅行について 13名
- 4月23日 「大和自生椿展」協賛
- 5月15日 「文化財やまと」第五号発行
- 5月26日 日帰り研修旅行 滋賀県野州町銅鐸博物館で開催の「東氏展」参観 41名
- 6月13日 執行部会、総会の開催準備について
- 7月9日 平成6年度総会および記念講演、演題「郡上地方の歴史と文化の特色」講師岐阜県歴史資料館館長丸山幸太郎先生(講演、東氏文化顕彰会と共催) 36名
- 8月7日 薪能「くるすざくら」協賛
- 9月19日 中国档案、文物考察旅行に、土松会長、畑中副会長、高橋(義)理事参加
- 11月24日 執行部会、1泊2日研修旅行の企画、役員会について
- 12月5日 執行部会、同上につき旅行者を招致
- 12月12日 執行部会、同上の詳細計画につき業者を招致
- 12月22日 役員会、事業中間報告、1泊2日研修旅行計画他
- 1月30日 執行部会、阪神大震災による研修旅行計画の対策協議
- 2月13日 執行部会、情報収集上記実施可能を確認募集方再手配
- 3月20日 執行部会、旅行者を招き上記計画の最終打ち合わせ
- 3月27日 1泊2日研修旅行、播州清水寺、赤穂、姫路城 27名
- 3月28日

“妙見宮にご祈禱祈願した”

東常縁の古今伝授

高橋 義 一

良文は、虚空に向かつて一心に神仏の加護を祈った。すると染谷川上空に、一二・三歳の童子が現れ、七騎の先頭に進み、落ちた矢を拾って味方に与え、または敵に射かけ、利剣を振るつたので、七騎が数千騎にも見えて国香の大軍は敗走した。

河辺に、妙見菩薩を祭る七星山息災寺という寺のあることを知って、七騎は礼拝し神忠の儀を奉った。良文は、郎党粟飯原文次郎常時に、その仏をぬすんで供奉することを命じた。常時は山伏姿にやつして、三年間、朝夕その神前に伏し、主君良文の在国へ移ることを祈願した。

願いが聴き届けられて、在国秩父郷へ請来した。良文字孫に継承されて、千葉一族の千葉郷北斗山金剛授寺（現千葉神社）に、同氏の守護神として祭られた。いと明建神社の「栗栖郷妙見大菩薩縁起」（町重文）に書かれている。

このような妙見菩薩の不思議な超能力を、私は決して疑いはしない。理由は、本誌三号に「明建さまの不思議」と題して、氏子の故尾藤竹造さん・清水定治さんと私、三人の体験実話を載せ、今もって

明建の不思議な神力のあることを書いた。も一度簡略に述べると、尾藤竹造さんは、戦前の中国青島で多数の船を持ち、捕鯨・運送等を経営する大実業家に成功していた。戦争になり、船は次々軍に徴発され運宮でなくなったので、家族全員、他の帰還者と共に北鮮の港から新潟港へ引き揚げた。航路には米潜水艦がいて、輸送船はほとんど沈められ、もうこの船が最後だと聞かされた。

竹造さんは心配のあまり、夜は船尾のデッキに立って、魚雷攻撃の航跡など見えないか、海の左右の闇に目をこらしていた。すると航跡の上空に、妙見菩薩尊像が洗々と現れたので、一心に祈った。

船室に降りて来て、妙見さまの守護を皆に告げ、必ず無事に帰れると話した。帰り着いた途端に終戦となった。夫は、神棚の妙見さまに、朝晩必ずのりとを上げて拝んでいた。いと奥さまの話である。して、北海道の基地へ帰還した。

清水定治さんは、日本領千島列島最北キスカ島のさらに北の島の守備隊に属した。一日、内地から慰問袋が各兵に一個づつ配られた。にしまっておいたが、いつの間にか旗は失せていた。いと定治さんの話である。

警視庁の科学捜索陣の手腕はすごい。報道関係を通じて、日々進展する捜査段階を見ていて、つくづく感じ入った。東京地下鉄サリン事件が発生した時は、松本サリン事件の行き詰まりを見ていたので、非常な難問だと思ったが、二か月余りで目鼻を着けて大詰めに入ったように報道される。

「東常縁の古今伝授」は、昨年秋、井上宗雄・島津忠夫編『東常縁』が発行されたのを契機に、五か月余りで難解な全容を解明し理論化することができた。第二次大和町史編集委員会の英知を背景にしてである。――本論はいずれ発表の機会を得よう。

資料を広汎に集め、綿密に分析し調査を重ねて総合的判断を下すという実証科学的方法によって事

件を解明することは、歴史界でも警察界でも同じことであると見える。しかしである、闇夜をひらく、快刀乱麻、無から有を生ずるなど、どんな形容の言葉をもってしても、私生活まで滅却した必死の追及なくしては、その言葉を当てはめ得ないことを当事者は痛感する。

とまあ、婉曲ながら手前みそになりかけたのでやめて、ここに解明された「東常縁の古今伝授」を、発表に先駆けてすこし紹介する。

●妙見さまの不思議な神力

一〇世紀の前半、坂東平氏の間

に紛争が起きた。上野国（群馬県）染谷川周辺に、おじとおい良文・将門の合併軍が、良文の兄常陸大掾国香の大軍と戦った。しかし良文・将門の軍は大敗して、七騎しか残らなかった。

このように、妙見菩薩の不思議な超能力を、私は決して疑いはしない。理由は、本誌三号に「明建さまの不思議」と題して、氏子の故尾藤竹造さん・清水定治さんと私、三人の体験実話を載せ、今もって

あるのを知った。慰問袋から出し、手にして見ると、在所の明建神社の氏子衆の名前が、一ぱい書き込まれている。北海道で部隊編成された時、ただ一人の岐阜卓人として入ったが、衛生兵の腕を買われたいらしい。どこ行きとも知らされず、出発直前、全員郷里宛て便りを書かされただけに、まるで今の居所が分かったかのよう

に、在所から慰問袋が届けられた。不思議に思いながらも、三拜九拝して、お守りとしてしっかり腹に巻き着けた。

アツ島玉砕の話が伝わり、毎日敵機が飛来し、敵潜の浮上した話も聞かされ、島は封鎖されているようであった。そして撤退命令が下り、その午後、日本の潜水艦が港湾に浮上した。その時、濃霧が立ち込めた。何ごとも警戒の要が少なくなり、全員速やかに乗艦して、北海道の基地へ帰還した。

復員後、牧の氏子衆に話を聞いたが、誰も寄せ書きして送ったことを知らなかった。たんに大切にしまっておいたが、いつの間にか旗は失せていた。いと定治さんの話である。

私小学一年生の秋、握り飯を腰に巻きつけ、近所の友達数人と一〇秒もたったか、家の門敷居をまたいだ瞬間、ただいま、という一声からして出なくなった。父母兄弟全員が夕げの最中であった。母は私の口の動きを見て、質問をくり返す。結局、明建さま鳥居前の道路南側に、防火用水か、モルタルで石の練り積みした小さい深い池があり、どんびきが一匹はまり込んでいたので、神さまにまともに向かって、小便をまりかけたことを思い出した。

それを聞いた母は、それぞれ明建さまのバチが当たったと言いつ、「風邪をひいたかも知れんで、飯食ってこたつに入って寝りゃ直る」と、少しも心配そうではなく、私も安心して、その通りにした。翌朝、けろりとして学校へ通った。故土松純治氏の話は、右三人の話とは別である。土松さんは、明建神社七日祭りの祭礼者の一人で、時々祭礼者の厳しい精進潔斎の今昔話をされた。そのうちの二話である。祭り一週間前から潔斎をしても、一晩の不心得のため、神前

の盃がどうしても手から落ちてドロクが注いでもらえず、黙って退座し、後で笑いながらわけを話した者がいた。君の話も、きれいな妙見さまの足にひっかかって、拜殿からよく転げ落ちたわんぱく坊と同じだ。しかし決してけがなどしない、と言って私の話を少しも不思議がってもらえなかった。◎明建神社蔵「栗栖郷妙見大菩薩縁起」(町重文)に見る密教 平安初期に興きて同時代を風びした二大宗教、真言・天台宗は唐から伝法した密教というものを軸にして隆盛した。口や耳で教えられる顕教とは違って、身・口・意一体となって菩薩に近づくと、を修得する秘密の教が密教である。修法中の姿は一見、祈祷加持に見え、オーム真理教信者がヨーガを修する姿態に似る。もっとも密教の源流はヒンズー教ヨーガにさかのぼる。しかしその真言密教の修得は容易ではなく、灌頂を受けて阿闍梨というその道最高の位を得ることは至難であった。大方は安易な雑部密教に流れて、祈祷加持の術を修得し、それが主流のようになって行った。

さて、千葉市立郷土博物館『妙見信仰調査報告書』により、千葉氏の妙見信仰の実態が明らかにされた。千葉氏の北斗山金剛授寺は、密教の守護神牛頭天王を末社に祭り、初めから真言宗高野山金剛峯寺に属して密教を修していたことも分かった。そして、明建神社の「栗栖郷妙見大菩薩縁起」にある先述「染谷川の戦い」以来の事が、くわしく調査報告書の古い史料「源平闘諍録」などにそのままあることが知られた。しかも、縁起の最後の部分だけが美濃国山田庄栗栖郷に因ったものであることも分かった。すなわち、その所を分かりよく記すと、一 「御祈祷の贖(木簡のこと) 妙見社 神主 右大札表書きかかくのごとし、内は妙見御身の御影、板にすりて(中略)宝珠の内に十曜の星蓮台にして、その下に、北辰星王妙見尊守護を修む、と書き入れ、安産守り・愛敬守り・牛馬守り・雷除け守り・疱瘡守り・疫氣守り・一切の守り、以上七種の加持祈祷は一子相伝、他に伝えず(中略)祭礼神事に出す 加持有り、別に家伝せり」と、密教中の秘伝が修法加持されていくことが分かる。また、東氏が妙見を奉じて山田庄へ入部以来の神主栗飯原家の文書に、「弘法大師秘伝一牧八封・九曜星仏縁起」(町重文)という一巻がある。これは、日本真言宗開祖弘法大師秘伝の易占書である。神仏習合時代の妙見宮は、垂迹神・九曜星こと北辰星王、その本地仏を妙見菩薩とする。この神・仏を縁つて、いわば占星術のような易占をする秘伝書とみられる。とにかく、妙見宮が真言宗系の密教のもとに、易占や加持祈祷を修していたことは、縁起や弘法大師の秘伝書などから間違いないと判じられる。 ◎「尊星王院」院主は、栗飯原神主の公算大 では妙見宮に、密教の修法僧が住していたかどうかという事が問題になる。 古代中世の社寺には、ほとんど別当寺が付随してその神仏習合などを手助けしていた。中世の妙見宮には「尊星王院」が別当寺として付随していたとみられる。近くの木蛇寺や「かんじょう寺」などは性格を異にし、その名のごとく妙見菩薩の垂迹神北辰星王こと尊星王を祭ったものと思われる。従って当院は、神主支配が至当と考えられる。 大多数の社寺は、神官職と僧職を兼ねていたから、妙見宮の別当寺「尊星王院」の院主は、妙見宮神官栗飯原神主が兼職して住持したと考えられる。そして神に対しては祝詞や修祓を行い、仏に対しては密教を加持し、神仏両者縁起の易占など、両職兼任で司った公算が大きい。 なぜならば、先掲「御祈祷の贖・妙見神社主」を見ると、神主(栗飯原)が真言密教を加持祈祷しており、また栗飯原家に伝えた「弘法大師秘伝」は、同神主がその易占を司ったことを物語るからである。その弘法秘伝の易占も、密教の加持修法の中にあつたと見られる。とにかく神仏習合・神仏混淆・神主兼僧侶・融通無碍の時代であつた。 ◎妙見宮神前で「常縁の古今伝授」 頭書に述べた「東常縁の古今伝授」論の最終部分を抜抄すると、「かくて妙見神前の常縁の古今伝授儀式は、神への祝詞に修祓を

し、密教加持のもと誓詞を交わし、
深く心腑に染めて文は護摩火に投
じ、長い祈祷の後、受戒の意の込
められた灌頂の儀が常縁によって
宗祇に施された。時に文明三年八
月一五日中秋の名月。祭壇・護摩
火に、修法僧・神主、衣冠束帯の
常縁、墨染衣の宗祇、客分として
大坪基清も正装で加わったとみら
れ、彼等の振る舞いはまるで新能

のような情景であつたらう。
何も知らず全く関係の無い幼童
だった私でさえ感じた妙見菩薩の
偉大な神力を、最も信仰厚く筆頭
の氏子であつた常縁が感じていな
いはずがなく、常縁・宗祇間の「
古今伝授」を末長く守らせ給えと、
御祈祷中、真剣必死で祈願したに
相違ない。

のも一々藩庁へ届けて許可をもら
わねばならなかった。その例の一
つとして剣観音堂の三十三観音の
場合を「剣村留帳」の中からかい
つまんで紹介しよう。
弘化三年九月一七日に剣村と大
間見村の村役人連名で「剣と大間
見村境の観音堂という古跡は堂跡
や古いお墓があり、村人の信仰の
霊地であるが、最近では申う者もな
い為か、陰鬼の業か折々凶事・怪

してあり、これを検分にきた郡代
に見咎められて大騒動になった。
剣、大間見両村では三三三とも願っ
たのでは到底許可にならないと考
えての嘘の願書を提出したのであ
った。代官所から早速弁明書を差
し出す様に嚴重な達しがきたので、
そこで両村の村役人が知恵を絞っ
て書き上げたのが次の弁明書であ
る。

ちよつと長いのでどうかと思
き恐れ乍ら左に申上奉り候
つたが、村役人の苦心の跡に興味
を覚えたのでほぼ全文を掲る事と
した。
（読みやすい様に一部読み下しに、
また送りかななどを付けた）
今度両村境山字観音堂と申す所
に石像の観音式体建立御願い申し
上げ、開眼の儀取り行い候処、願
いの外に多分観音建之有の趣、御
間に達し、御尋ね遊ばされ候に付

大和町 策散 石仏

吾 信 代 有

平成二年一二月に大和町郷土史
研究会が発足して最初の仕事とし
て取り組んだのが「石仏調査」で
あつた。足掛け四年かかって全地
域の調査を一応終了した。その概

要については『史苑やまと』第一
号に佐藤光一さんが書いて見える
ので見ていただきたい。私もこの
グループに加わって蹤いて歩いた
のであるが、まず驚いたのは石造
物の多いことであつた。その中で
石仏が一四〇体ある。石仏の内
断然多いのが観音さまで八八体、
次に多いのが地藏さまの四〇体で
ある。施主、建立の年月等の無い
のが多いが、はっきりしているの
では、安永九年（一七八〇）ころ
から寛政、文化、文政、弘化年間
（一七八九〜一八四七）ころのが
多い様である。中には、明徳三年
（一三九二）の観音さまが大間見
に二体あるがこれらが当町では最
も古い方であろう。
封建時代では、石仏を建立する
か三三三体建立



十一番准胝観音

元来右観音堂と申す山の儀は、往々に付き、在来の心得にて委細の儀を申上奉らず、並に御役方様御見回りの節にも右の訳合申上げ奉らるる礎等も今に確に之有その外、寺屋敷並に古井戸、古墓処、石地藏、候通り、古墓所にて折々凶事も之観音等之有候場所にて御座候に付き、有儀に付き、往々は古墓毎に石像御願い申上建て申し度き心願に御座候、然る処今度心得の処、御尋ね遊ばされ候へ共、前文の次第開眼の序を以、何心無く後より建候向きも之有哉、両村の役人共不行届きの段重々恐れ入り奉り候、何卒此上は御慈悲を以、御憐愍の程偏に願い上げ奉り候

尤前条申上げ候通りの訳に御座候へば何卒此上凶事之無き為、御慈悲を以、建立御赦免の程御嘆き申上げ奉り候 以上
弘化三年十月十三日

又は土中よりは迄追々掘り出し候石像故、右式体の石像を切り候序に修復仕り、都合式拾体にも相成候儀にて風聞の所如何御聞に達し候哉、即御同心小頭様より御尋ねも之有候得共、開眼の儀は式体と御願い申上奉り候に付き、式体と申上奉り候儀に御座候、然る処其の余にも多分建立之有候趣御尋ね遊ばされ候へ共、外に石像の儀は新規に建立と申すにも御座無候儀

の役人立ち会いのもと、麓に取り片付けて一件は落着いたのである。こうした苦心の末に建立された観音様かと思つて拝むと、どの観音様も実に良く出来ているし、百五十年も経っている様に思えないほど綺麗である。

三十三観音は町内にもう一個所、牧の篠脇城跡への登り道にある。こちらの方は、明治四二年五月一日に日置彌一郎外四名が県知事へ建立許可願を提出し、竣工は翌年四月二〇日で、盛大に除幕式が挙行されている。

これらはいずれも多くの淨財と、封建時代であるための苦勞も多かったことが、残された史料から汲みとることが出来る。この外に水に溺れて亡くなった可愛い我が子の為に建立した地藏菩薩像や観音菩薩像、または山道で落ちて死んだ馬の供養の為の馬頭観世音像など、または、道行く人の安全を祈願しての峠の石仏など、その一つひとつに由緒や伝承が有ったのであるが、それらがだんだん消え去ろうとしているのは悲しいことである。これらを調査して後世に残したいというのが石仏調査の目的の一つでもある。

篠脇文化顕彰会

加藤 一 男

昨年十一月三日、篠脇文化顕

彰会員二十六人で、篠脇城跡に腰掛を六基設置しました。腰掛は簡単

なもので、できあがってみれば、

これだけのものがあるが、材料を山頂まで運ぶのが大変であった。

一基を作るのに栗丸二本、上部は長さ二メートルの米松二本を用

いた。いずれも重さが四〇キロ余

り。最初は背負うか担ぎかを覚悟

していたが、登山道はつづらであるが道幅があるので、運搬車の「

ご協力をお願いします。

杖つきて二人仲よく篠脇の

山に東氏の歴史たずねな

なお、次には東氏ゆかりの史跡に

案内の標柱を立てようと思つてい



文化財一泊旅行に

参加して

井 俣 初 枝

播州清水寺

兵庫県といえば「源氏物語」など、万葉以来詩歌にうたわれた文学遺跡のたくさんあるところだというお話をよく聞いております。私はこういう旅が大好きなんです。すが、今回は春の研修旅行ということで、十二代景行天皇のとき、法道仙人が開創したと伝えられる古刹で、西国第二十五番霊場清水寺を訪ねました。今年には気候が不順なため桜の花の蕾もかたく、閑静な周辺の景色を楽しむとまではゆかないが、バスで登山道を三千メートルのぼりつめたところで、御嶽山清水寺の仁王門に出会いま

した。平成四年ごろでしょうか、その光景が私のまなうらに焼きついてはなれませんでした。行ってみたい、阿弥陀三尊像に出会いたいと思いつづけてきました。武藤先生の作成して下さった旅の道筋に浄土寺が記されており、心がはずみました。テレビでうつついだされた浄土寺場所であるユースホテルで精進

料理をいただきました。

清水寺の所在地は、社町で、兵庫県のほぼ中央、播磨平野の北東部に位置し、新緑のころに訪れることができれば、また良かった思いをめぐらすことができるのではないのでしょうか。

春の気をまとい阿吽の仁王門

極楽山浄土寺

NHKのテレビで浄土寺を見ました。平成四年ごろでしょうか、その光景が私のまなうらに焼きついてはなれませんでした。行ってみたい、阿弥陀三尊像に出会いたいと思いつづけてきました。武藤先生の作成して下さった旅の道筋に浄土寺が記されており、心がはずみました。

テレビでうつついだされた浄土寺

の外観は、実に美しく、今まで聞いたこともなかったお寺の存在が不思議でした。

河合先生の説明で存分に拝観させていただき、旅のしおりに目をとおしながら、木造阿弥陀三尊立像の前で、ふり仰ぐ写実的な作風と伝えられるお顔は、おだやかで、地球上に存在するものは、みな丸く見えるような錯覚すら覚ええました。

三尊像の中心の阿弥陀如来は、高さ五・一五メートル、脇侍の観音・勢至菩薩は二・四二メートル天井にとどくほどの巨像で、その巨大さと重量感は堂内を圧倒しているほどでした。須弥壇のうしろの方へまわってみますと、みごとに來迎が作られていました。極楽浄土に導くのでしょうか。

テレビの映像で部戸をあげて夕日のさし込むときの三尊像は実に美しく、上部部分が光で浮かび上がって神々しさを感じました。

浄土寺の境内には、八幡神社がありました。創建は明らかではありませんが、浄土寺の鎮守社として建てられたようです。

丁寧な拝観はできなかったけれど、どの建造物を見ても、当時の

人々が仏教界に活躍したことを物語っているように思え、私なりに 春愁や蓮華浄堂のほとけたち



播州清水寺にて

平成七年度

事業計画(案)

- 4月 執行部会
- 5月 執行部会、役員会、監査人会報「文化財やまと」発行
- 6月 執行部会、総会ならびに研修会(講演会)
- 7月 東氏館跡庭園除草(泉水浚渫を含む)作業奉仕
- 8月 薪能協賛
- 9月 執行部会
- 10月 役員会
- 郷土史勉強会
- 11月 執行部会、日帰り研修旅行
- 12月 執行部会、役員会
- 2月 執行部会
- 3月 役員会、1泊研修旅行

文芸欄

妻籠 桜

尾 藤 佐紀子

未だ見ぬ大山蓮華の咲く庭へ

無字の碑の肩にもとまる花嵐

信州高遠の桜によせて

山田 昌 枝

朗詠に応えこたます芽木の山

映映す植田の中の塚一基

寒椿献体塔へ続く道

有代 信 吾

瀨の音に耳をすましつ橋渡る背に
舞う桜花に心酔いつつ
音もなく散りしく桜花びらの水に
流れて帰り来ぬなり

田 中 まさを

山門の怒髪の仁王冴え返る

天深し鶏頭の赤また深し

八朔の踊り忘るな忘れ草

神路の八月一日の踊

直 井 すゞ江

なにはなくともつつがなく初明り

訪れて逢えず門には雪だるま

花疲れまくらに熱きぼんのくぼ

井 俣 初枝

逝く春や常縁歌碑の雨細か

法縁にあひ人に逢ひ山桜

一服の茶をもてなされ花巡る

山 下 照代

南天の雪を散らして小鳥翔つ

土につく程の腹して春の猫

愛想してそっぽを向かれ春うらら

横 枕 千代子

着ぶくれて地震情報くぎづけに

髪洗い紅さし女の春浅き

毛糸編むほかに業なき齢なり

短歌

春の研修旅行

土 松 新逸

快くすきたるおなかに美味しかり

清水寺の精進料理

足弱きひと思いつつわれもやや疲

れてのぼる階段長し

極楽山浄土寺の国宝浄土堂弥陀三

尊のみ面やさしも

心地良く酔いて踊るも旅宿に今宵

世の憂きことは忘れて

朝の日に真白くひかる姫路城日本

の美とあかず見上ぐる

高 遠 桜

金 子 政子

桜花満ち人々も満ち満ちて高遠城

跡の堀は静けし

渋滞すパスの窓より立き並ぶ店の

品々評し合うなり

俳句

高 橋 義 一

落花敷き落花に埋もれて城うたげ

江島屋敷乳房囲みし落花かな

歌も句も色失なへり花ラッシュ

信州高遠の桜に見惚れて

本 田 村 人

かわたれの湯桶の音や弥生尽

絵島生島花冷えの名調子

元のようにそっと土かけ春浅し

黒 岩 きくゑ

水蹴つて鴉川原の芦枯らす

初鏡老の分別無ふんべつ

寒の水かぶり鴉の色ざんげ

日 置 繁

花冷や独居の読経に鳴る電話



高遠城本丸跡、ま白な落花を敷いての宴

平成七年 四月末日現在

會員名簿

(順序不同)

一劃一

山下運平(顧問)	二四〇六	高橋叙子	三七九二	石神堯生	二四一三	村瀬弥一(理事)	二六〇二	滝日 治	三四〇六
旗 勝美(顧問)	二〇三一	野田八重子	二二六二	稲葉春吉	二五〇三	一河辺一	二〇一九	齋藤太門	三九三二
村瀬喜八	二二二八	一 大間見一	二二三三	黒岩きくゑ	二四六〇	清水幸江(理事)	二〇一九	松森 茂	三九三三
山下真一	三四九五	村井正蔵(監事)	二二三三	寛 明代	二五三三	横枕千代子	二三四九	加藤一男	二八七〇
河合俊次(理事)	二二四六	青木新三	二四三六	三島秋男(理事)	二四六一	清水テル子	二〇二一	清水 定	二七一〇
畑中澄子(理事)	二五〇七	日置 繁(理事)	二二五四	桑田信夫	二四一九	前田 孝	二一〇一	日置元衛	三四一七
畑中定夫	二二六八	大野紀子	二二三〇	桑田和子	二四一九	前田 鈴	三六六六	粥川 溜	三三七八
小池久江	二五七六	野田英志(理事)	二二八五	桑田渥見	二四四六	白田とも子(理事)	二二五〇	本田欽一(理事)	三一六〇
山下ふみえ	三二二七	小野江選量(理事)	二七二六	桑田信夫	二四一八	白田百合子	二〇四六	野田嘉明	三〇四三
加藤正恵	二一〇七	清水一作	三〇八六	黒岩弘美	二四五八	岩谷敏子	二〇六三	尾藤佐紀子	二三五三
高橋 明	二四八八	山下直美	三九三八	井俣初枝(理事)	二七五八	岩谷敏子	二〇六三	加藤登美子	二八七〇
日置照郎	二〇七二	池田充彦	三〇九〇	青地正男	二四四七	岩谷ゆう	二三八八	一 栗果一	
加藤文蔵	二八〇二	小野江勉	二七二五	大井静子	二三三八	岩谷ひとみ	二六八三	島崎増造(監事)	二二三六
佐藤光一(理事)	三二〇一	池田栄枝	二二八五	大井正明	二八九四	岩谷千代子	二一一一	増田洋子	四〇四一
田中 和久	二二〇〇	池田恒純	二八七九	旗 清子	四一七〇	一 神路一	二〇八三	寛政之助(理事)	四〇三一
高橋義一(理事)	三三九二	日置智恵子(理事)	三〇五二	桑田アサ子	二四三九	森 忠敬(顧問)	二〇八三	中山周左門	二七二八
河合 恒	二三五八	坪井政夫	四〇九二	井上妙子	三五〇八	白田尊徳	三三三〇	武田信康	二二八四
河合芳英	二三〇四	松井賢雄(理事)	三九九一	一 徳永一		羽生 清	二二七一	鷺見豊夫	二七八八
加藤小弐	二三二九	古田 忠	四〇九〇	木 島 泉(理事)	四一八二	山田真人(理事)	二二一四	野田光誠	四〇二七
奥村千代子	二〇二二	藤代順行	三〇六〇	鷺 見 清	二〇〇五	一 牧一		一 古道一	
武藤正文(理事)	三一九〇	池田柳松	二三五五	鷺見おと	二二八九	金子政子	三四二六	細川 優(理事)	二八六一
河合久子	二二〇三	大野一道	二二三〇	直井すゞ江	三五九二	滝日準一(理事)	二七〇五	清水克巳	二八六二
田仲龍子	二二六一	佐藤義子	四〇一〇	矢野原幸子(理事)	二〇七七	栗飯原高照	二二六二	清水行雄	三九〇八
山下昭代	二四〇六	玉木吉郎	三四一五	田中まさを	二〇六七	土松康二	二七一九	歳藤堅正	三九七九
畑中節子	四一五六	青木ふじ枝	二二〇三	水野志づ子	二六一〇	日置貞一	二六六二	金子藤男	三〇七五
		小野木花子	二七四七	山内孝一	二六一六	土松貞二	三九八〇		



長谷川順一	三九一四
清水久子	三九〇八
一名血部一	
有代信吾(副会長)	三七九一
有代和夫	二二〇一
尾藤由	三三三〇
森下正則	三三九一
下広茂一	三三八五
佐尾チドリ(理事)	三五五四
立石春枝	三八八五
鷺見昭三	三三三一
一島一	
森藤幸(顧問)	二七〇六
森藤雅毅(理事)	二六八四
須甲甚一(理事)	二六六七
山田長次(理事)	三六四八
山田昌枝	三六四八
森数雄	二五五四
山田良	二七九一
田中篤	二七九二
奥田昌明	二五二〇
直井篤美	二六二二
此島修二	三六五九
直井洋子	二六二二

平成6年度決算書

(収入の部) (単位:円)

項目	予算額	決算額	増減	摘要
前年度繰越金	107,999	107,999	0	
会費	1,545,000	1,262,500	△282,500	
会員費	315,000	316,000	1,000	正会員 2,000×154 家族会員 1,000×8
特別会員費	1,230,000	946,500	△283,500	日報研修 6,000×41・宿泊研修 25,000×38・役員会 1,500×17
補助金	80,000	80,000	0	
寄付金	1,000	35,000	34,000	土松会長 15,000・加藤文蔵 5,000・森藤幸 5,000・有代信 吾 5,000・三島秋男・5,000
諸収入	1,001	388	△613	
合計	1,735,000	1,485,887	△249,113	

平成7年度予算書(案)

(収入の部) (単位:円)

項目	予算額	前年度	増減	摘要
前年度繰越金	138,185	107,999	30,186	
会費	1,583,000	1,545,000	38,000	
会員費	313,000	315,000	△2,000	正会員 2,000×152 家族会員 1,000×9
特別会員費	1,270,000	1,230,000	40,000	日報研修 6,000×40・宿泊研修 25,000×40・役員会 1,500×20
補助金	80,000	80,000	0	
寄付金	1,000	1,000	0	
諸収入	815	1,001	△186	
合計	1,803,000	1,735,000	68,000	

(支出の部)

項目	予算額	決算額	増減	摘要
会議費	130,000	114,217	△15,783	
総会費	55,000	45,956	△9,044	
役員会費	75,000	68,261	△6,739	
事業費	1,480,000	1,144,785	△335,215	
研修費	1,400,000	1,085,045	△314,955	日報研修 256,000 宿泊研修 695,000 研修助成 134,045
会報発行費	80,000	59,740	△20,260	
記念事業費	0	0	0	
事務局費	35,000	700	△34,300	
消耗品費	5,000	0	△5,000	
通信費	20,000	700	△19,300	
旅費	10,000	0	△10,000	
助成金	80,000	72,000	△8,000	
予備費	10,000	16,000	6,000	
合計	1,735,000	1,347,702	△387,298	

(支出の部)

項目	予算額	前年度	増減	摘要
会議費	120,000	130,000	△10,000	
総会費	50,000	55,000	△5,000	
役員会費	70,000	75,000	△5,000	
事業費	1,515,000	1,515,000	35,000	
研修費	1,340,000	1,400,000	△60,000	日報研修 240,000 宿泊研修 1,000,000 研修助成 100,000
会報発行費	75,000	80,000	△5,000	
事業費	100,000	0	100,000	
事務局費	22,000	35,000	△13,000	
消耗品費	2,000	5,000	△3,000	
通信費	10,000	20,000	△10,000	
旅費	10,000	10,000	0	
県本部会費	80,000	80,000	0	
積立金	60,000	0	60,000	重要史料出版基金の積立
予備費	6,000	10,000	△4,000	
合計	1,803,000	1,735,000	68,000	

収入 [1,485,887] - 支出 [1,347,702] = 138,185 (7年度繰越金) (注)平成7年5月15日会計監査済

編集後記

◆「濁世の起悪造罪は、暴風驟雨にことならず」(親鸞聖人)と七百年余もまえにいわれた言葉は現在の世相そのままです。こうした不安の中に、会員の皆さまにはいかが御消光でしょうか。会報第二〇号の編集を終わって一息つきました。号を重ねるにつれ、マンネリズムにおちいるのではないかと反省しています。会員の皆様から、きたんのないご意見をおよせ下さい。

◆今度、町の教育委員会から『大和町の文化財』が発刊されました。当町にこんなすばらしい文化財が残存していることに驚嘆します。ひとえに先人の偉業のためものと思います。会員の皆様はたは是非一冊を求めて、文化財保護の目的を果たしていただきたいと思います。

◆いつもながらのお願いで恐縮ですが、原稿をお寄せ下さい。研究事項・随想・旅行記・民俗資料の紹介・身近なできごと、など何でも結構です。

◆天候不順の折柄、ご自愛の程を念じ上げます。(五月中流畑中記)